様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　５日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2008　～　2012
課題番号：20330142
研究課題名（和文）
妊娠産褥期の母親のメンタルヘルスと幼児期の虐待傾向
研究課題名（英文）
The relationship between maternal mental health in gestational and postnatal period and mother’s abusive tendency to her infant.
研究代表者
本城　秀次（HONJO SHUJI）
名古屋大学・発達心理精神科学教育研究センター・教授
研究者番号：90181544

研究成果の概要（和文）：近年、母子関係の問題に関する関心が出産後のみならず、妊娠期まで拡大してきた。そこで、母親-胎児愛着という概念が注目を集めている。妊娠中の抑うつ、胎動、妊娠月齢が母親-胎児愛着に関連した要因として挙げられてきた。しかし、その結果は一貫したものではない。この研究は母親-胎児愛着と妊娠中のIWMといった要因がどのようにかかわっているかを探求しようとしたものであり、それにより母子の関係性の改善に役立てようとしたものである。

研究成果の概要（英文）：In recent years, interest in mother-child interaction has been extended to cover not only the post-natal period but the gestational period as well, wherein the concept of maternal-fetal attachment has become a focus of attention. Depression during pregnancy, quickening and gestation age has been cited as factors associated with maternal-fetal attachment, but results have not been consistent. This study was designed to investigate the relationship between maternal-fetal attachment and factors such as the internal working model of the pregnant mother.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総　計	7,000,000	2,100,000	9,100,000

研究分野：児童精神医学・乳幼児精神医学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：妊娠産褥期、抑うつ、母親愛着、児童虐待、メンタルヘルス

1.　研究開始当初の背景

近年わが国において児童虐待の増加傾向が言われており出産後早期からの母子関係の重要性が指摘されている。そして、妊娠産褥期からの母子関係や母親のメンタルヘルスの問題が子どもの身体的、情緒的発達に大きな影響を与えることが認識されるようになった。NICUに入院中の子どもなどの心理面に対する対応の重要性は認識されつつあったが、具体的な臨床的介入や研

究はほとんど行われておらず、未開拓な分野であった。
　そうした中で母親のメンタルヘルスの問題や母子間の関係性の問題を幅広く取り上げ、児童虐待などの母子関係障害の問題を解明しょようと試みることは重要な学問的課題であった。

2.　研究の目的
　母親のメンタルヘルスの重要性が産後早期から認識されるようになり母親の抑うつや、母子相互作用といった問題に注意が向けられるようになってきている。愛着概念は最初、子どもが母親に向かって接近するといった子どもの行動に対し Bowlby が命名したものである（1969）。さらにこの概念は Ainsworth らによって、発展させせられ、安定的愛着、回避的愛着、抵抗的愛着など愛着のスタイルが区別されるようになった。愛着は、一般的には子どもが養育者に対して特異的に示す行動と考えられているが、最近では、母親が子どもに対して示す行動に対しても母親愛着という言葉が用いられるようになっている。しかし母親は子どもが生まれてきて初めて愛着を形成するものではなく、すでに胎児に対して愛着を形成していると考えられ、母親-胎児愛着と呼んでいる。本研究では、母親の有する母親-胎児愛着に関連する要因について検討し、母子の相互作用に影響を与える要因を明らかにすることを目的としている。

３．研究の方法
　名古屋大学医学部附属病院産科を受診した妊婦を対象に妊娠初中期より前方視的に調査を実施した。対象者は 401 名であり、妊娠初期の調査開始時に書面及び口頭で調査の趣旨について説明し、調査に協力しなくても何ら不利益はないこと、調査途中で参加を中止することができることを説明し、参加に同意したものである。また、本研究は医学部倫理委員会の承認を得ている。
　各調査時点で質問紙調査を実施した。調査時点は妊娠初中期、妊娠後期、産褥期、産後１カ月、産後６カ月、１歳、１歳半、２歳、2 歳半、3 歳の時点であった。質問紙の内容は、各調査時期で異なるが、母親の抑うつ、母親の子どもに対する愛着等を測定する尺度は、主要な尺度として、各時期の質問紙に含まれている。デモグラフィックなデータは初回の調査で聴取しているが、主な尺度は以下のものである。
1　母親-胎児愛着尺度（Maternal-Fetal Attachment Scale（Cranley,1981）
2　内的ワーキングモデル測定尺度（久保田、1995）
3　回想された親への愛着に関する尺度（佐藤、1993）

　これらの尺度以外に各調査時期に特有な調査が実施されている。

４．研究成果
　本研究では母親―胎児愛着を Cranleｙの MFAS（Maternal fetal attachment scale)を用いて測定し、妊婦の自分自身の親との愛着関係、他者との内的ワーキングモデル IWM がどのように母親－胎児愛着と関連しているかを明らかにすることによって、母親－胎児愛着が妊婦の幼児期からの対人関係のありようによって、どのような影響を受けているかを明らかにし、母子関係の障害の表われのひとつである児童虐待の予防について検討した。
　妊婦の自分自身の親との愛着関係、IWM, 母親-胎児愛着の関係についてパス解析を行い、検討を加えた。
　人生早期に子どもと母親の間に形成される愛着パターンは時間とともに変化していき、子どもは次第に母親との愛着スタイルとは異なる他者に対する関係性を支配する IWM を構成して行く。本研究では、母親-胎児愛着と子ども時代の自分自身の親との妊婦自身の関係、現在の他の大人との関係性に関する IWM との関係性を明確にしようという試みである。とりわけ母親-胎児愛着と自分自身の親に対する母親の愛着の関連性についての研究は極めて少ないもので、今日までわずかのことしか知られていない。この問題を取り上げているのは我々の知る限り愛着スタイルと母親-胎児ボンディングに関する一つの論文しかない。その研究によると、妊婦の愛着の安定性は胎児に対するボンディングの強さと関連しており、安定した愛着の女性は回避的愛着、抵抗的愛着の女性より胎児に対する愛着が高くなる。それによると、自分自身の母親との間に安定した関係を有している女性において胎児との愛着関係が強いことを示唆している。我々の研究はその研究とは次の点で違っていた。すなわち我々の研究では、他者との関係を支配する母親の IWM とは別に、母親-胎児愛着と子ども時代の自分の親との愛着の関連について検討を加えている。それによると子ども時代の自分自身の親に対する愛着のすべてのスタイルと secure の間に有意なパスが存在した。このことは現在の大人の関係を決定する IWM を通して子ども時代の親に対する愛着の効果が母親－胎児愛着に影響を与えていることを示している。親の不信/拒否や両親からの分離不安は母親―胎児愛着に直接的な影響を持っておらず、

親に対する強い不信や親からの強い分離不安は他者に対する親和性は低く、また胎児に対する愛着は低いと考えられた。

こういった所見から、母親-胎児愛着は母親の自分自身の親との直接的な愛着関係の影響を受けるものではなく、母親の IWM を通して母親に間接的な影響を与えていると考えられた。

以上、親の IWM と自分自身の親に対する安定/信頼パターンの愛着が母親-胎児愛着に与える影響はポジティブなものであった。それ故、人が成長過程の中で獲得することができる正の安定的な経験の量が胎児に対する愛着スタイルに影響を与えたと考えられた。

このような結果から母子の愛着関係は、母親自身の自分の母親との母子関係と青年期の IWM が相互に影響し合っていると考えられた。

この研究を開始して以来、これまでに調査に参加した妊婦は初回の調査では、約 800 名である。しかし、継続して調査に参加した人の数は調査回数を重ねるごとに減少し、生後 2 年の時点で約 150 人、生後 3 年の時点で約 45 名といった人数になっている。そのため、本研究では、長期的な経過については検討を加えることが困難であった。この点において、今回の研究は限界を有している。今後、データを増やすことによって、母子の愛着形成に関与している要因を明らかにしていくことが母親の虐待傾向を防止する要因の解明に重要な役割を果たすと考えられられる。

本研究はそのための第一歩である。

これまで虐待の世代間伝達の問題が注目され、大きな関心が示されてきた。しかし虐待の問題で何がどのようにして伝達されるのか、明確なところは分かっていなかった。我々の研究では、母親の自分自身の母親に対する愛着が青年期から成人期の IWM と相互に関連しながら、母親-胎児愛着に影響を与えていることが明らかとなった。それ故、妊娠期から母親の内的表象に注目することによって、母子の愛着関係に介入する可能性が考えられる。

このほか、これまでいくつもの研究を行い、その成果を発表してきた。その一つとして、子どもの行動特性を規定し、子どもの親子関係に影響する要因として、子どもの気質を取り上げ、研究を行ってきた。その一つに、1 カ月児の気質尺度である EITQ（Early Infancy Temperament Questionnaire）（Caey et al,1998）の検討を行っている、EITQ は生後 4 か月までの乳児の気質を測定するための尺度であるがこれまで十分な検討はなされていない。

EITQ に関して、尺度の検討がほとんどなされていないため、EITQ,産褥期母親愛着尺度、自己評価式抑うつ尺度を用いて調査を行った。対象は回答のあった 116 名である。その結果、EITQ は 7 因子構造であることが明らかとなった。また、愛着得点と EITQ の「気分の質」において、有意な正の相関がみられ、「持続性」において有意な負の相関がみられた。EITQ に関する研究は予備的なものに留まっており、EITQ の信頼性、妥当性もまだ確立されていないが、今後、子どもの行動を非常に早期から測定できる可能性があり、今後の成果が期待されるところである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 19 件）

1) Ogura M, Okada, K. Hamada, S, Asaga, R, Honjo, S (2012) Ijime in Japan. Int J Adolesc Med Health 査読有 24, 69-76.

2) 本城秀次、野邑健二、栗山喜久子、鈴木太、吉川徹（2011）神経症性障害について．精神神経学雑誌　査読無し、113, 704－711.

3) 金子一史、本城秀次（2009）親の精神障害が児の早期発達に及ぼす影響.査読無し、精神科治療学、24; 569-574.

4) 本城秀次（2008）乳幼児精神医学の現状と展望.精神医学、査読無し、50, 318-328.

〔学会発表〕（計２８　件）

1) 本城秀次、吉川徹、野邑健二（2012）広汎性発達障害の診断と鑑別—児童青年医学の視点から.
第 35 回日本精神病理・精神療法学会夜話会、2012 年 10 月 4 日、九州大学医学部.

2) 小倉正義、田中裕子、本城秀次(2009) 幼児期の強迫様行動や習癖、チック—感情特性や攻撃性との関連に注目して.第 50 回日本児童青年精神医学会総会抄録集、pp.273, 2009 年 9 月 30 日ー10 月 2 日、国立京都国際会館.

〔図書〕（計１７件）

1) 本城秀次、小倉正義、田中裕子（2012）診断基準・診断概念 [1] 従来的診断.齊藤万比古、金生由紀子編　子どもの強迫性障

害 — 診 断 ・ 治 療 ガ イ ド ラ イ ン --, pp.50-52.
2）本城秀次（2011）乳幼児精神医学入門. みすず書房.
3) 本城秀次編（2009）よくわかる子どもの精神保健.ミネルヴァ書房.

６．研究組織

(1) 研究代表者

本城秀次（HONJO SHUJI）
名古屋大学・発達心理精神科学教育研究センター・教授
研究者番号：90181544

(2) 研究分担者

金子一史（KANEKO HITOSHI）
名古屋大学・発達心理精神科学教育研究センター・准教授
研究者番号：80345876

野邑健二（NOMURA　KENJI）
名古屋大学・発達心理精神科学教育研究センター。特任准教授
研究者番号：50345899

(3) 連携研究者

なし